

シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査

—保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために—

陳 惠貞

摘要: 日本における子どもの貧困問題がとり沙汰されてから久しい。シングルマザー世帯の貧困に関する意識調査を行い、学生の貧困問題への関心と理解を調査した。本研究では、学生全般ではそれほどシングルマザー世帯の貧困への関心が高くないという結果になったが、保育者・教員養成校の学生の方が一般学生よりシングルマザー世帯の貧困への関心がやや高い。シングルマザーを見聞きした状況も、一般学生の大半はテレビのニュースであるが、養成校の学生の多くは授業であった。そして、貧困の事例を取り入れた講義を丁寧に解説することによって、理解や関心を高める効果があったことを実証した。筆者は保育者・教員養成校で、教育心理学・発達心理学・保育の心理学・幼児理解の理論と方法・心身の発達と学習過程など教職関連の授業を担当している。調査結果を各授業にフィードバックし、学生に保育・教育の仕事はいかに子どもの発達を支え、子どもを貧困から守るかを理解させることによって、専門職として保育者を目指す学生の意識を高め、モチベーションや学習意欲を高めることをねらいとしている。

キーワード: シングルマザー世帯の貧困、モチベーション、保育専門職、教職

1. 研究目的

「待機児童ゼロ」というスローガンを掲げた現政権によって、つい先日2019年10月に「保育料無償化」が始動した。しかし現状は、保育士不足を解消しないまま、子どもたちの行く場がなく、今にもまして保育士は待遇を改善されないまま、そのうえ長時間保育が強いられる。保育士の離職率が高まり、ベテラン保育士の育成は難しくなる。保育士の一斉退職により、閉園に追い込まれた認可保育所ⁱがあったことは衝撃であった。現職の保育士からも、子どもたちの居場所づくりに苦慮している現状が報告されている。規制緩和による企業の参入で、保育・教育環境の悪化が目に見え、助成をめぐり詐欺などの事件が報道されたⁱⁱ。また、「保育料無償化」と言われ

ながら、実際には園が値上げし、保護者が払う金額が増したという逆転現象により不条理さが生じた。また、いままで懸命に稼ぎ、保育料を払ってきた人たちに世代間の不公平感、世帯間の格差が広がる懸念ⁱⁱⁱなど、様々な問題で新たな社会問題に発展している。このような不安定な社会の中で、一番影響を受けているのは社会の弱者であり、特に子育て中のシングルマザー世帯である。

日本における子どもの貧困問題がとり沙汰されてから久しい。1997年に中田らの『日米のシングルマザーたち』^{iv}が出版されてから、シングルマザー世帯の貧困が注目された。あれから22年を経た現在もなお「子どもの貧困」が深刻化している。筆者は2017年より3年間、「東アジア保育者養成研究会」で「現代の子どもの貧困」の課題に取り組み、連続して日本保育学会で、国際比較研究及び日本での事例研究を通して共同研究をしてきた^v。

一昨年度、筆者は本機関誌で、「シングルマザーの貧困と子どもの発達に関する一考察—保育者をめざす学生の学習意欲を高めるために—」^{vi} というテーマで、シングルマザー世帯における生活の困窮と子どもの発達とのかかわりについて調査を実施し、分析結果を発表した。昨年度、「シングルマザー世帯の貧困に関する調査研究—保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために—」^{vii} というテーマで発表、支援する手立てを探ることを目的とし、シングルマザー世帯の新たな事例を取り上げて分析した。筆者は保育者・教員養成関連の授業を受け持っているかわら、調査結果を各授業にフィードバックし、学生に保育の仕事はいかに子どもの発達を支え、子どもを貧困から守るかを理解させる。そのことによって、専門職として保育者を目指す学生の意識を高め、モチベーションや学習意欲を高めることをねらいとしている。常に研究成果を教育現場へフィードバックすることを意識し、保育者・教員養成に役立てようとすることは大学教員の務めであると認識している。

その目的意識を持ちながら、2018年5月に日本保育学会第71回大会において、「シングルマザーにおける生活と子育て—現代の子どもの貧困」というテーマでポスター発表を行った[註V(3)]。 「子どもの貧困」が注目される中、日本における最新の情報を把握しつつ、シングルマザー世帯の子育ての厳しい現状を調査し、支援策を探っていた。その研究成果を学生にフィードバックしていく際に、幼児保育・教育現場の事例を取り上げた。保育者のチームプレーによって救われたシングルマザー世帯の実例を解説していたが、実感が湧かない学生が多くいたことに気づいた。そこで、いまの学生たちが感じている貧困というものは、どのようなものかを調べる必要があると考えた。保育者を目指す学生に、身の回りにおきている貧困を見極める目がなければ、これから保育・教育現場に立った際、貧困に脅かされている子どもを救えないのではと危惧したからである。

そこで、学生たちの周りにどのような事態が潜んでいるか、またどのように認識しているのかを質問紙調査を通して明らかにしていくことを本研究の目的とする。

なお、本研究にある保育者と保育士の用語の使い分けを断っておきたい。保育者は、保育所の保育士と幼稚園教諭と小学校教員の総称とする。保育士は引用先に従って、忠実にそのまま引用

した。

II. 研究方法

1. 調査の概要

調査対象：愛知県内の学生 161 名に質問紙調査を行った。内訳として、Aグループ：「生活困難な家庭への保育と支援」の事例の授業を受けた保育者・教員養成校（以下は保育者養成校と略す）の学生 69 名と統制群としての一般学生 24 名、計 93 名であった。Bグループは、貧困の事例の授業を受けていない一般学生 68 名である。

2. 調査時期

実施期間は 2018 年 10 月～11 月であった。

3. 調査方法

Aグループの学生に対して、まず、「生活困難な家庭への保育と支援」¹ の事例を紹介し、後に質問紙調査を行った。調査時間は約 1 時間前後。Bグループの学生に対しては、事例の提示がない。日本の子どもの貧困問題とシングルマザーの貧困を簡単に説明し、調査の趣旨に触れ、調査協力を要請した。調査時間は約 15 分。すべての調査対象に無記名方式で、統計処理を行う説明をし、倫理的な配慮を確認した。また、調査結果を学会や論文発表することの了承を得た。

質問紙について概ねの内容：（全部で 6 問だが、第 1 問には 21 項目の質問がある。第 2～6 問は自由記述である。）

1. あなたの考える「シングルマザーの貧困」はどのようなものですか？（21 項目）
2. あなたはシングルマザーの貧困について関心がありますか？
3. あなたはシングルマザーの貧困について見聞きしたことがありますか？
4. あなたの周りに子育て中のシングルマザーがいますか？
5. あなたの周りに事例のような要支援な子どもがいますか？
6. もしあなたが保育士だったら、事例のような貧困のために支援を必要とする子どもにどのような援助をしたいですか？

III. 結果と考察

Excel の統計機能を用いて、度数分布や割合を算出し比較した結果である。

まず、質問紙の第 1 問に「あなたの考える『シングルマザーの貧困』はどのようなものですか？」の 21 項目について、分析した結果を「生活の質」・「世帯の家計の状況」・「保護者の状況」という 3 つのカテゴリに分けた。（表 1 参照）

「生活の質」：

- (1) 携帯電話・スマホをもっていない。

¹ 小堀智恵子・和田亮介（2017）「生活困難な家庭への保育と支援」『季刊 保育問題研究』284 号,pp.314-317

- (2) ダイエットをしていないのに食事抜き。
- (3) いつも汚れた洋服を着つづけている。
- (4) お風呂（シャワー）に入らず、清潔を保っていない。

「世帯の家計の状況」:

- (5) 電気・ガス・水道代が払えないことがある。
- (6) 医者にかかりたくても、支払いが心配で我慢することがある。
- (7) 子どもの学用品費や給食費が払えないことがある。
- (8) 食料品（野菜・肉・魚・果物など）が買えないことがある。
- (9) 必要な学習参考書などが買えない。
- (10) 自動車を買えない。
- (11) テレビ・冷蔵庫・クーラーを買えない。
- (17) 持ち家に住めない。
- (18) 家賃の支払いが滞納している。
- (19) 生活保護を受けている。
- (20) 返済できないローン（借金）をかかえている。
- (21) 1年に1回くらい遊園地や動物園へいく余裕がない。

「保護者の状況」:

- (12) 十分な教育を受けていない（中卒・高卒、大検も含む）。
- (13) 安定した正規の仕事を見つけることができない。
- (14) よく子どもを怒鳴る。
- (15) 生活費を稼ぐため子どもの世話が十分できない。
- (16) 生活に金銭的・精神的な余裕がない。

Aグループ、つまり「生活困難な家庭への保育と支援」の事例の授業を受けた保育者養成校の学生と統制群の一般学生について、各項目において大きな差はみられなかった。一方、A（資料あり）とBグループ（資料なし）の間は、(1), (10), (17), (21)の4つ項目を除いて、他の17項目のすべてBグループ（資料なし）が有意に貧困に対する意識が乏しい。（図1）

さらに、17項目のうち、(3), (4), (5), (7), (9), (14), (15), (18), (19)の9項目にAとBグループの間に25%以上の差異があり、Bグループのほうが低いことが分かった。どのような項目内容でAとBグループ間の学生が貧困に対する意識の開きがあったかを確認する。(3) いつも汚れた洋服を着つづけている。(4) お風呂（シャワー）に入らず、清潔を保っていない。(5) 電気・ガス・水道代が払えないことがある。(7) 子どもの学用品費や給食費が払えないことがある。(9) 必要な学習参考書などが買えない。(14) よく子どもを怒鳴る。(15) 生活費を稼ぐため子どもの世話が十分できない。(18) 家賃の支払いが滞納している。(19) 生活保護を受けている。つまり、事例研究の資料を用いて学習することによって、貧困に対するイメージがより具現化し、理解し易くなったと言えよう。ちなみに、21項目のうち、それぞれの群による貧困の○チェック数の平

表1 第1問：シングルマザーの貧困の21項目結果

グループ	貧困に対する意識																					
	カテゴリ	1 生活の質					2 世帯の家計の状況					3 保護者の状況					2 世帯の家計の状況					貧困〇の数の平均
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
項目	携帯・スマホ所持	食事の欠食あり	汚れた服	入浴・清潔不十分	電気・ガス・水道代延滞	受診抑制	学用品費・給食費延滞	食料品購入抑制	学習参考書購入抑制	自動車購入抑制	テレビ・冷蔵庫等購入抑制	低学歴	非正規	よく子どもを怒鳴る	子どものケアへの時間不足	経済的・精神的余裕無し	借家	家賃延滞	生活保護家庭	返済不能のローン有り	年一回の行楽無し	
A (資料あり)	11.6%	55.1%	62.3%	59.4%	81.2%	69.6%	81.2%	55.1%	65.2%	37.7%	43.5%	50.7%	44.9%	40.6%	89.9%	79.7%	37.7%	63.8%	72.5%	58.0%	36.2%	12.0
一般学生A	8.3%	41.7%	66.7%	58.3%	87.5%	62.5%	83.3%	50.0%	70.8%	16.7%	45.8%	50.0%	37.5%	58.3%	79.2%	87.5%	20.8%	79.2%	70.8%	54.2%	25.0%	11.5
一般学生B (資料なし)	8.8%	36.8%	27.9%	20.6%	47.1%	50.0%	55.9%	29.4%	38.2%	35.3%	26.5%	39.7%	27.9%	16.2%	48.5%	63.2%	30.9%	29.4%	39.7%	32.4%	30.9%	7.4

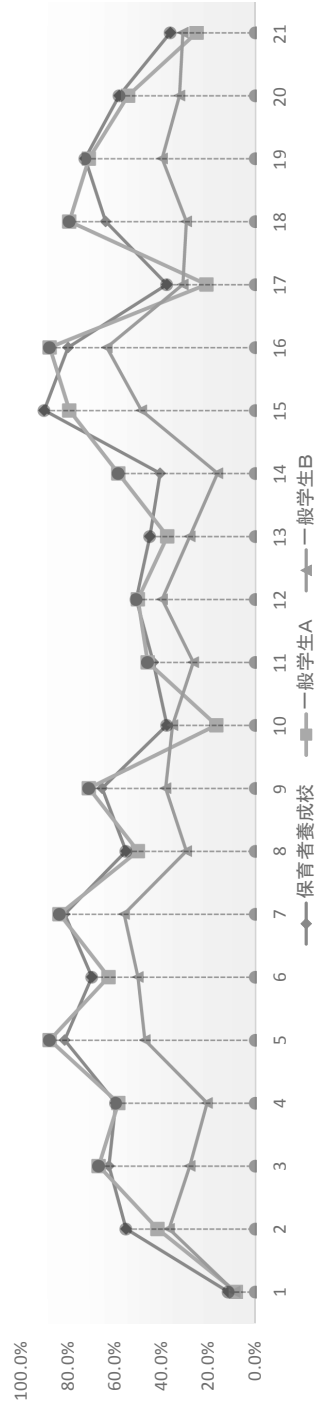


図1 AとBグループ間における貧困における意識の差

均値は、Aグループの保育者養成校群が12.0項目、一般学生A資料あり群が11.5項目、そしてBグループの一般学生B資料なし群が7.4項目であった(表1)。以上の結果より、まず貧困に対する意識を高めるには実例を挙げることは効果的であることが明らかになった。多いに授業に取り入れることによって、意識を高めることが期待できる。

質問紙の第2問「あなたはシングルマザーの貧困について関心がありますか?」について、161名のうち関心があるのは50名(31%)；関心がないのは24名(15%)；どちらでもない(曖昧)86名(53%)；無回答(欠損値)1名であった(表2参照)。シングルマザーの貧困について関心がある学生は31%を占める一方、関心がない学生は15%を占める。日本社会を騒がしている貧困問題にたいして、学生の関心度はやや低いように思われる。さらに、表2に示している()の中の数字は保育者養成校学生の結果であるが、保育者養成校学生と一般学生の関心度など各欄の人数は約半々の割合になっている。ただその中で、関心がない欄にある24名のうち、7名の保育者養成校学生が占める割合は29%で特に少ない。つまり、被験者の学生全般において、貧困問題に対する関心がやや低いなか、保育者養成校学生は関心がないものは少ないことになる。その他、特に求めてはいなかったが161名のうち15名(10.7%)がシングルマザー世帯の当事者であることを自ら明かした。実際にはそれ以上の可能性があると推測できる。身近な問題だけに、もっと多くの学生が関心を持って取り組んで欲しい課題である。さらに教員として、もっと多くの学生が関心を示すように取り組まなければいけない課題でもある。

表2 第2~4問の統計結果

n=161

質問内容	ある	ない	曖昧	欠損値
2問：あなたはシングルマザーの貧困について 関心がありますか？	50 (27 ; 54%)	24 (7 ; 29%)	86 (35)	1 (0)
3問：あなたはシングルマザーの貧困について 見聞きしたことがありますか？	51 (25 ; 49%)	75 (30 ; 40%)	33 (9)	2 (1)
4問：あなたの周りに子育て中の シングルマザーがいますか？	58 (27 ; 47%)	60 (29 ; 48%)	42 (13)	1 (0)

()の中の数字は保育者養成校学生の結果；対一般学生との割合

質問紙の第3問「あなたはシングルマザーの貧困について見聞きしたことがありますか?」について、161名のうち見聞きがあるのは51名；見聞きがないのは75名；どちらでもない(曖昧)33名；無回答(欠損値)2名であった(表2参照)。表2では表せない自由記述の部分は、保育者養成校の学生の方が一般学生よりシングルマザーの貧困への関心が高い。シングルマザーを見聞きした状況も、一般学生の大半はテレビのニュースであるが、保育者養成校の学生の多くは授業であることが分かった。

質問紙の第4問「あなたの周りに子育て中のシングルマザーがいますか?」について、161名

のうちいるのは58名；いないのは60名；わからない（曖昧）42名；無回答（欠損値）1名であった（表2参照）。

質問紙の第5問「あなたの周りに事例のような要支援な子どもがいますか？」について、Aグループのみの回答になるが、93名のうちいるのは2名；いないのは51名；わからない（曖昧）40名；無回答（欠損値）0名であった。学生は周りに要支援な子どもがいるかどうかを判断するのが難しいと考える。また、周りに事例のような要支援な子どもの存在を信じたい気持ちの表れではないかと思われる。

質問紙の第6問「もしあなたが保育士だったら、事例のような貧困のために支援を必要とする子どもにどのような援助をしたいと思いますか？」については、Aグループのみの回答になる。要支援の子どもに対して行いたい支援について、学年が高くなるにつれて記述が具体的になり、子どもに寄り添う姿勢が表れていた。

考察1：Aグループ（資料あり）「生活困難な家庭への保育と支援」の事例の授業を受けた保育者養成校の学生と統制群の一般学生Aについて、第1問の各項目において大きな差がみられなかった。一方、Aグループ（資料あり）とBグループ（資料なし）との間は、4つの項目（1, 10, 17, 21）を除き、他の17項目のすべて、Bグループ（資料なし）が有意に貧困に対する意識が乏しい。さらに、17項目のうち、Bグループの方が9項目（3, 4, 5, 7, 9, 14, 15, 18, 19）に差異があり、Bグループの方は低いことが分かった。

考察2：シングルマザーの貧困について関心がある学生は31%を占める一方、関心がない学生は15%を占める。保育者養成校の学生の方が一般学生よりシングルマザーの貧困への関心がやや高い。シングルマザーを見聞きした状況も、一般学生の大半はテレビのニュースであるが、保育者養成校の学生の多くは授業である。第6問の要支援の子どもに対して行いたい支援については、学年が高くなるにつれて記述が具体的になり、子どもに寄り添う姿勢が表れていた。

考察3：質問紙の回答の中で特に求めてはいなかったが、161名のうち15名（10.7%）がシングルマザー世帯の当事者であることを自ら明かした。実際にはそれ以上の可能性があるかと推測できる。

考察4：これらの結果により、まず貧困に対する意識を高めるには実例を挙げるのが効果的であることが明らかになった。学習効果があるので、積極的に授業に取り入れることにより、貧困への意識が高まる。また、一般の学生は貧困に対する意識があまり高くないことが分かった。すぐそこに迫っている子どもの貧困という社会情勢を深く意識していないように見受けられた。調査対象である保育者を目指す学生について、専門知識に加えて、より社会情勢に目を向け、子どもの貧困を捉える目が必要であると考えられた。

IV. まとめ

本研究で、学生全般としては、それほどシングルマザーの貧困への関心が高くない結果となったが、保育者・教員養成校の学生の方が一般学生よりシングルマザーの貧困への関心がやや高い。シングルマザーを見聞きした状況も、一般学生の大半はテレビのニュースであるが、保育者・教員養成校の学生の多くは授業であった。そして、貧困の事例を取り入れた講義を丁寧に解説することによって、理解や関心を高める効果があったことを実証した。特に求めてはいなかったが、161名のうち15名(10.7%)がシングルマザー世帯の当事者であることを自ら明かした。実際にはそれ以上に多いという可能性があるかと推測する。長年、筆者は高等教育現場に立ち、大学の中途退学者が増えたのを実感している。学業を中退した理由として「経済的理由」が増え、中退学生の中ではシングルマザー世帯の多さが気になっていた。実はこれこそが近年筆者が貧困問題に取り組むようになったきっかけである。シングルマザー世帯が抱えている経済的な困難を払拭できない。そして、勉学中の学生たちに自分自身、または自分のまわりにもある貧困問題を抱えている・悩んでいる仲間がいることに気づいてほしい。学生たちにはお互いに気遣い励まししながら、学業を続けることがいかに貴重なことかを実感し、学習への動機づけに繋がればと願いながら学生指導に当たっている。

一方、教育者として日本の貧困問題、特にシングルマザー世帯の現状を保育者・教員養成校の学生に伝えている。学生が将来保育者になって、貧困に陥っている子どもに出会う際、保護者と子どもの気持ちを理解し、適切な対応ができるようにするのが教育者の重要な務めであると考えている。講義の中で学生に専門知識を伝授するだけでなく、最新の研究結果を学生に提供するようにしてきた。このように教育と研究の2本立てで、学生に理論と現実を理解させ、社会の現状を把握しながら時代のニーズに合う柔軟な態勢で仕事に臨むことができるように心掛けてきた。そこで講義を通して、学生たちにすぐそこにある貧困という厳しい現状と保育者が子どもたちの成長と発達を理解し、子どもたちのおかれている環境の変化を理解することの重要性に気づいてほしいと願っている。さらに、保育者・教員養成校の教員として、学生に子どもたちと保護者の気持ちに寄り添って、支援できるような保育の仕方を習得できるよう、指導することを目指している。その目的のもと、学生たちにシングルマザー世帯の貧困の意識調査を行った。講義の中で厳しい状況におかれているシングルマザー世帯の事例を丁寧に取り上げ、現状を理解させ、一方で今後の教学に示唆を得た。

すでに22年前に中田らによって『日米のシングルマザーたち』^{viii}(1997)が発表され、シングルマザー世帯の貧困がクローズアップされた。しかし現代の日本では「子どもの貧困」がさらに進行している。子どもの貧困問題を解決するため、まず一般の人々は貧困の実態を意識し、そこから解決法を探らねばならない。さらに、保育者・教員養成の立場から学生に「子どもの貧困」の現状を伝え、すでに貧困状態に陥っている子どもたちを救う。子どもの貧困を判断するには専門知識が必要なので、そこで保育者の専門性が問われる。2019年10月に公表されたOECD(経済協力開発機構)の調査結果によると、日本の保育者は社会から評価されていると感じる割合がほ

かの8カ国より低く、最下位という結果になった。OECDによる調査は保育従事者を対象に初めて行なわれ、日本のほかドイツ、韓国、ノルウェイなど9カ国が参加した。日本は3～5歳の子に関わる保育士ら1,616人、保育園や幼稚園の園長216人が2018年に回答したものであった。その結果、保育士らの仕事が評価されていると感じるかについて、日本は「社会から評価」が3割程度にとどまり、参加国の中で最低という。「社会からの評価の低さは、今もほかの職種に比べ10万円近く低い賃金など待遇の影響が考えられます」と秋田(2019)が指摘する^{ix}。また、保育の質の向上には、「保育士たちが働き続けたいと思えるよう、専門性が評価され、キャリアアップできる仕組みが必要です」と綴られた。保育者の専門性を高めること、人手不足を解消し、子どもたちを手厚く保育できるような環境づくりは保育・教育現場では待ったなしの喫緊課題である。ここから、子どもの貧困を救う手立てだと考える。

客観的に保育者の社会的評価が低い日本だが、保育に対する理念はけて低くはない。ノーベル賞受賞者であるジェームス・J・ヘックマンは、『幼児教育の経済学』という著書で、「非認知能力が生涯にわたる発達、社会生活全体での幸せに影響する」と指摘して注目された。教育の投資効果に関する研究だが、認知能力(テストの成績、読み書き、計算など)よりも非認知能力(意欲、実行力、協調能力など)が長い人生において多大な影響を及ぼすことを示唆した^x。この点において、日本の保育理念は非認知能力を培うことに優れている点は評価された。日本の保育現場では、リズム・歌・手遊び・絵本の読み聞かせのほか、思いやり・愛他性・協調性など従来の情操・道徳教育のような理念のもと、そこで培われる人間性は評価に値する。これが生涯において、幸福感を感じることに繋がると考える。このように人間の生涯に関わる大事なことに携わる保育者たちの仕事は何故日本社会では評価が低いのかと不可解に感じる。

2018年9月に『待機児童ゼロ』首相『今度こそ、終止符を打つ』^{xi}という新聞の見出しがあった。そしてついに2019年10月に「保育料無償化」が始動した。一見、政権の公約を果たしたように見えたが、冒頭に述べたように「保育士不足」・「保育士の待遇改善」・「保育士の高離職率」・「ベテラン保育士の不足」など諸問題が解決しないまま、さらに「保育士の一斉退職による閉園」^{xii}・「保育料の値上げ逆転現象」・「助成金の詐欺」^{xiii}など問題が噴出した。公約を果たすため「無償化」を優先し、保育者が置き去りにされたという厳しい現実となった。保育者待遇の悪さについても、長年指摘されてきたが、一向に改善できていない。聖職と称し、「ボランティア精神が悪用されている」という指摘(松田・北川, 2014)^{xiv}、また、新聞で報道された「酷使される保育士」(鳴沢, 2014)^{xv}などの指摘も相次ぐ。2017年10月時点で、「保育士の賃金加算なども進めるが、それでも16年の平均賃金は額面月22万3千円。全産業平均より11万円ほど低い」^{xvi}と新聞に記載された。このような批評から数年も経ったが、保育者の待遇は一向に改善されていない。これでは、保育者の社会的評価が低く、待遇が改善されないままでは夢見て保育者を志す学生が現実の厳しさを知った途端、モチベーションが下がり、養成校の中退者が増える一因にもなるし、転職率・離職率が高くなる一因にもなる。保育者不足解消、人材確保するためにも保育者の待遇を改善することが緊急課題である。

保育者・教員養成の立場から学生に「シングルマザー世帯の貧困」・「子どもの貧困」の現状を伝えることで教育的な意義を果たす。筆者は保育者・教員養成校で、教育心理学・発達心理学・保育の心理学・幼児理解の理論と方法・心身の発達と学習過程など教職関連の授業を担当している。保育者・教員養成関連の授業を受け持っているかわら、自分の研究活動をいかに教育活動に活かすか工夫し、実践している。専門職教育の一環として、我々は学生に専門知識を伝授し、研究成果を学生にフィードバックし、学生に実習や卒業後の仕事に反映できるようにする。今回のシングルマザーの貧困状況の調査を活かして、学生に専門職としての保育者の仕事はいかに子どもの発達を支え、子どもの命を貧困から守るかを理解させる。少子化の中でこそ、保育の質を向上し、子どもたちの命を守る保育者の専門性をさらに高めるよい機会である。保育者不足の中で、保育者を目指す学生の夢を実現できるよう、これからも保育者の処遇問題に取り組み、学生たちの保育者になるモチベーションを高め、学習意欲を高めることに努めたいと考えている。

謝辞：

調査に当たって、協力していただいた被調査者の学生たち並びにBグループの統制群調査に協力していただいた教授に深く感謝申し上げます。

追記：

本研究の一部は2018年5月に開かれた日本保育学会第71回大会に於いて発表したものを加筆し、まとめたものである。筆者は、「東アジア保育者養成研究会」の一メンバーとして活動している。

【註】

-
- ⁱ 仲村和代・田淵紫織(2019)「過労・薄給・不信 相次ぐ保育士の一斉退職」朝日新聞, 2019年5月17日付, 14版23面記事
- ⁱⁱ 伊藤舞虹(2019)「待機児童の受け皿『量』急いだ果て」(審査ずさんな企業主導型「質」置き去り)朝日新聞, 2019年7月10日付, 13版25面記事
- ⁱⁱⁱ 宮本太郎(2019)「世帯間の格差 広がる」(フォーラム 幼保無償化バラ色?)朝日新聞, 2019年9月29日付, 13版9面記事
- ^{iv} 中田照子・杉本貴代栄・森田明美(1997)『日米のシングルマザーたち』ミネルヴァ書房
- ^v (1)陳惠貞・劉郷英・丹羽正子・平岩定法・中田照子・宍戸健夫 2017 現代の子どもの貧困—日中比較研究①日本の実態— 日本保育学会第70回大会発表要旨集, 511, 発表 ID:K-D-8-290
- (2)劉郷英・陳惠貞・植村広美 2017 現代の子どもの貧困—日中比較研究②中国の実態— 日本保育学会第70回大会発表要旨集, 512, 発表 ID:K-D-8-291
- (3)陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・宍戸健夫 2018 シングルマザーにおける生活と子育て—現代の子どもの貧困— 日本保育学会第71回大会発表要旨集, 1196, 発表 ID:P-D-13-4
- (4)陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・宍戸健夫 2019 保育専門職の学生におけるシングルマザー世帯の貧困の意識調査—現代の子どもの貧困— 日本保育学会第72回大会発表要旨

集, 1139-1140, 発表 ID:P-D-5-4

- vi 陳惠貞 (2018) 「シングルマザーの貧困と子どもの発達に関する一考察—保育者をめざす学生の学習意欲を高めるために—」 『子ども学研究論集』第 10 号, 名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター, pp. 1-12
- vii 陳惠貞 (2019) 「シングルマザー世帯の貧困に関する調査研究—保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために—」 『子ども学研究論集』第 11 号, 名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター, pp. 1-15
- viii 前掲書, 中田照子・杉本貴代栄・森田明美 (1997) 『日米のシングルマザーたち』ミネルヴェ書房
- ix 秋田喜代美 (2019) 「人手不足・低賃金が背景に OECD 調査日本の保育者、低い『評価実感』」朝日新聞, 2019 年 11 月 22 日付, 13 版 19 面記事
- x ジェームス・J・ヘックマン(2015) 『幼児教育の経済学』(古草秀子訳) 東洋経済新報社, pp. 17-18
- xi 田渕紫織・中井なつみ (2018) 「『待機児童ゼロ』首相『今度こそ、終止符を打つ』」朝日新聞, 2018 年 9 月 5 日付, 13 版 2 面記事
- xii 仲村和代・田渕紫織(2019) 「過労・薄給・不信 相次ぐ保育士の一斉退職」朝日新聞, 2019 年 5 月 17 日付, 14 版 23 面記事
- xiii 伊藤舞虹(2019) 「待機児童の受け皿『量』急いだ果て」(審査ずさんな企業主導型「質」置き去り)朝日新聞, 2019 年 7 月 10 日付, 13 版 25 面記事
- xiv 松田史朗・北川慧一(2014) 「年収 300 万 待遇改善拒む企業」(「酷使される保育士」)朝日新聞, 2014 年 8 月 25 日付, 13 版 4 面記事
- xv 鳴沢大(2014) 「社福でもたりぬ人手 行事に忙殺」(「酷使される保育士」)朝日新聞, 2014 年 8 月 25 日付, 13 版 4 面記事
- xvi 西村圭史・植松佳香・田渕紫織(2017) 「子育て支援 課題積み残し」朝日新聞, 2017 年 10 月 5 日付, 13 版 3 面記事

【参考文献】

1. 鷹咲子 (2013) 『子どもの貧困と教育機会の不平等 就学援助・学校給食・母子家庭をめぐって』明石書店
2. 小堀智恵子・和田亮介 (2018) 「保育園は人とつながり、しあわせになる場所—子どもの貧困と保育園」『愛知保育問題研究』第 27 号, pp. 36-46
3. 大山典宏 (2013) 『生活保護 VS 子どもの貧困』PHP 新書 897
4. 山野良一 (2008) 『子どもの最貧国・日本 学力・心身・社会におよぶ諸影響』光文社新書 367

陳 惠貞 (名古屋経営短期大学子ども学科 教授)

